

オリ主と阿良々木くんが喋るだけ

霜降り

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

暇つぶしに書いたオリ主が阿良々木くんと喋るだけの話です

物語シリーズ読んだの結構前だから阿良々木くんの口調とかちよつとおかしいかも

目次

オリ主と阿良々木くんが喋るだけ	1
「……………」	7
?	16
正夢	21
お昼休み	26
キャラ付け	30
無思考	34
ハッピーバレンタイン!	38
愛とは?	42
のじゃろり狐ババア	46
時代とかもうめんどくせえ……	50
ハロウィン	54
現実	58
結婚	62
な	66

オリ主と阿良々木くんが喋るだけ

「阿良々木先輩って、妖怪とかって信じますか？」

学校からの帰り道、生意気な後輩に急に話しかけられ、びつくりする。

「そうだな、見たら信じる派だ」

まあ、本当は信じているが、なぜなら僕は妖怪を見たことがあるからだ。

というか僕が妖怪みたいなものだし。

「へー、現実主義ですなぁ、阿良々木先輩なら即答でいるって答えると
思っただけどなぁ」

「現実主義とはちよつと違う気がするが？」

「いやあ、阿良々木さんにしては現実的だなあと思っただですよ」

「それは、僕に喧嘩を売ってるのか？」

「阿良々木先輩が喧嘩売ってると思うならそうじゃないんですか？
まあ私は阿良々木先輩はこんなかわいい後輩に暴力をふるうような
人じゃないと信じてますよ」

「お前はホントずるいな」

「いやあ、それほどでも」

ほめてねえよ、という言葉が口から出かけたが口を食いしばって耐える、こいつにそんなことを言ったら逆効果だ。

「どうしたんですか？そのなんか言いたそうなアホみたいな顔は」

訂正、言わないのも逆効果だ。

「とういかなんで急に妖怪の話なんてしてきたんだ？」

「いえ、ここ最近商店街のばば…おっと失礼今のは忘れてください、お
ばさま方から、小学生に抱き着くロリコンという妖怪がいたそうで、
阿良々木先輩も抱きつかれないように気をつけてください」

「今の発言に対して僕はどこから突っ込めばいいんだ？」

なんで僕がロリコンに狙われるんだよ、そしてロリコンは妖怪ではない。
ない。

「とういとか気をつけないといけないのはお前だろ、そんなんでも女な

んだし」

「むー、そんなんでもってなんですか、そんなんでもって、私はロリコンに抱きつかれるほどロリじゃないですよ」

「それなら僕もロリじゃないから抱きつかれる心配はないな」

「え、阿良々木先輩自分のことロリだと思ってたんですか、キモッ」

「いくら冗談でも女子からキモって言われるのは男にとしてもものすごく傷つくからやめてくれ」

「やだなあ、阿良々木先輩なら大丈夫ですよ」

良かった冗談だったようだ本気だったらまじで傷つく。

「冗談じゃなくて、本気ですから」

「お前ホントやめろよー!」

「あれ、てつきりドMの阿良々木先輩ならキモって言われて喜ぶと思っただのに」

なんで僕がドMってことになっているんだ、僕はノーマルだ。

「いやだって、あのDSケ原先輩と付き合ってるんでしよう? だから阿良々木先輩もドMかなあって」

「僕は彼女がものすごくひどいあだ名で呼ばれたことか自分が勝手にドMにされてたことどっちに怒ればいいんだ?」

「知りませんが、彼女を馬鹿にされたことと自分が馬鹿にされたこととどっちで怒るかを、悩んでる時点で彼氏としてどうかと思いますよ」

確かにそうだな、じゃあ

「誰かドMだ!僕はノーマルだ!」

「はい!それでこそ阿良々木先輩です!」

近くに戦場ヶ原いないよな?

「そこで保身に走るのも阿良々木先輩ですねえ」

「失礼だな、もしこれを戦場ヶ原に聞かれたら僕の身体が壊れてしまうから当たり前だろ」

「ふむ、どうやら私は事実を言ったままであったようだ」

まじで今の会話を戦場ヶ原に聞かれたら文房具を穴という穴に刺されかねない。

「良かったじゃないですか、卒業できますよ」

「僕はいったい何を卒業したんだ？」

「厨二病じゃないですかね」

「僕は厨二病はとっくに卒業している」

「ああ、そうでしたね、厨二病は卒業して高二病に入学したんでしたっけ？」

「高二病ってなんだ、高二病って」

「高二病は高二病ですよ、厨二病が不治になったものです」

「それ卒業じゃなくて留年だろ」

「確かにそうかもしれないですね、流石阿良々木先輩ですね物知りです」

「別に僕は物知りじゃないけどな」

「そーですかね？性癖のこととか何でも知ってそうですけど」

「何でもは知らないわよ、知ってることだけ」

「は？」

「は？」

羽川のモノマネとわからないのか!?

「すみません羽川さんのモノマネには気づきましたけど、阿良々木先輩が女言葉で喋ってるのがキモかったの」

「僕さつきキモって女子に言われるのきついつて言わなかったか？」

「ドMの阿良々木先輩なら平気でしよう」

「なんでお前はそんな僕をドMにしたがるんだ」

「だって阿良々木先輩はドMですし」

「違いよ！」

「即答で否定、凶星の特徴ですね」

「どうやらお前と会話すること自体が間違いだったようだ」

話が全く通じねえし。

「えー、別に悪口言ってるわけじゃないですかー」

「お前、無自覚なのか？」

だとしたらもう才能だ。

「おや、会話してくれるのですか、嬉しいですねえ」

「お前には、人を苛つかせる才能があるな」

「阿良々木先輩が褒めてくれるなんて!!……おやどうしましたその何か言いたそうな顔」

「いや、なんでもない」

「そーですか、にして人を苛つかせる才能ですか、じゃあこの才能を活かすためにまで色んな人と喋らなきゃですねえ」

「やめろ、才能の使い方を間違えるな、というかその才能を捨てろ」

「嫌ですよ、世の中才能を求めている人はたくさんいるん出すよ?才能捨てたらその人達がかわいそうじゃないですか」

「大丈夫だ、その才能を欲しがるやつはいないから」

「じゃあ私は欲しいので私が貰いますね」

「ああ、うん、そうか」

「なんですかその、諦めたかのような表情」

「諦めたんだよ」

「諦めたらそこで試合終了ですよ?」

「その試合を終わりたいから諦めたらんだよ」

「それはそれは、阿良々木先輩はガッツがたりないですねえ」

「お前との試合ならあの先生でも諦めるだろうな」

「結局世の中才能ですか」

「雑にしめようとするな」

「いいじゃないですか、この作者暇つぶしに書いたせいでネタなくなつてメタに走り始めましたし」

「それを言い始めたら終わりだ」

「そーですね、じゃあ作者は才能がないとして、阿良々木先輩才能なにかありますか?」

「別に才能なんかない、しいて言えば才能がないことが才能だ」

「そーですか?阿良々木先輩は物語の主人公なのにな?」

「メタはもうやめろ、別に主人公が才能あるとは限らないだろ、ほらよくある逆転劇とかの主人公」

「それは、逆転できる才能があるんですよ、主人公に才能がない人はいません」

「そうか？ずーと主人公が落ちぶれる物語もあるだろう」

「それは落ちぶれる才能があるんですよ」

「屁理屈だろ」

「屁理屈じゃないですよ、落ちぶれるってことはもともとそれなりの立場なんですから」

「結局屁理屈じゃないか？」

「阿良々木先輩がそう思うなら阿良々木先輩の中では屁理屈なんでしょう、私の中では阿良々木先輩がドMというのと同じです」

「お前の中の僕について聞きたいのだが」

「私の中の阿良々木さんはドMの才能マンですね」

「なんだ、その変態は」

「阿良々木さんですよ？」

「違う！僕はそこまで変態じゃない！」

「変態ではあるんですね」

「それは認めよう」

自分で言うのもアレだが僕は変態だと思う。

「というか、お前の中の僕は才能マンなのかよ、なんの才能があるんだよ」

「ほら…えーと…アレですよ、女たらし？」

「女たらしは才能じゃないだろ」

「そーかもですねえ、まあ他の才能は秘密です」

「なんで女たらし以外秘密なんだよ、むしろ女たらしを秘密にしろ」

「だって阿良々木先輩といえば女たらしじゃないですか」

「僕のイメージひどすぎないか？」

「そんなことないですよ、他の才能はいいやつですし」

「なら、それを言ってくれよ」

「いやです、そんなことしたら阿良々木先輩調子乗っちゃうじゃないですか」

ふむ、確かに

「いや、自分で納得しちゃだめだろ！」

「自問自答ですかダサイですね」

「なんで自問自答がダサいんだよ」

「さあ？なんででしょうね」

「お前がわかんなかったら誰もわからねえよ」

「確かにそうですね……まあ、いつか阿良々木先輩もわかりますよ」

「そうやって雑に締めるのやめろ」

「嫌ですよ、この話はここで終わりです、私はこっちなのでね」

「ほんとにこれで終わるのか……」

「では、さようなら」

そう言つて分かれ道を歩いていくあいつの背中は何となく寂しく感じた。

「阿良々木先輩流石にその締め方はどうかと思います」

「うるせえ」

「……………」

「こんにちは、阿良々木先輩」

「……今どこから出てきた」

「やだなあ……あつちから来たんですよ」

「僕の目にはお前の人差し指が地面に向かっていているように見えるのだが」

「阿良々木先輩の節穴な目でも分かってくれて良かったです」

「そういうことじゃない」

「そういうことですよ？私の中では」

「僕の中ではそういうことじゃないんだ」

「そうですね、良かったですね。ところで阿良々木先輩」

「さて、話を逸らそうとするな、どこから出てきたんだよお前、亜空間か？」

「亜空間とか……厨二病ですよ阿良々木先輩」

「僕は厨二病卒業してるからな」

「卒業してるということは入学はしたんですね」

「……………」

「くふふふ……さて、阿良々木先輩の過去の黒歴史は興味しかないんで話してください」

「さての使い方大きく間違えてるぞ、話逸らせよ」

「阿良々木先輩って友達いないんですか？」

「本当に逸らすな、そして友達いない前提の聞き方やめろ」

「だっていないですし」

「じゃあお前はなんなんだよ」

「私ですか？そうですね……じゃあ阿良々木先輩の彼女つてことで」

「唐突に告白するな、すまん僕には決めた人がいるんだ」

「阿良々木先輩もよくあんな危険人物と付き合えますよねえ」

「戦場ヶ原のことを危険人物と呼ぶな」

「いや、十分危険人物でしょう。あんな大量の文房具厨二病Lv. 1
00でも持ちませんよ」

「厨二病Lv. 100ってなんだよ」

「ほら、よくいるでしょ？ポツケにカッターとか入れてオレかけーってなってる厨二病。アレのLv. 100です」

「やっぱりLv. 100というのはわからんが、確かにポツケにカッター入れてるやつはいたな」

「いますよねえ、私も実は胸ポケットにカッター入れてるんですよ」

「厨二病はお前だったか」

「心外ですねえ、私はカッコいいからなんてダサい理由じゃなくて便利だからというストイックな理由で持ってるんです」

「日常生活でカッター必要な場面そんなないだろ」

「ありますよ、例えば……こうっ！」

「うおおっ!!」

「こうやって阿良々木先輩を驚かしたりできたりします」

「それは日常生活じゃないし、驚かすどころかこれ指から血出てる気がするんだが」

「そりゃ、出えますからね。視力大丈夫ですか？あと神経も」

「おいっ!!お前ふざけんよ!!」

「仕方ないですね、指出してください……はい、これで治りましたよ」
「舐めただけで治るわけが……治ってる!!」

「くふふ……これが私から分泌された唾液の力です」

「分泌って言い方やめろ。エロく感じる」

「変態ですねえ阿良々木先輩、ロリコンの上に変態とかすぐくすぐくアレですよ」

「さて、ロリコンどこから出てきた」

「それは阿良々木先輩の中から」

「僕の中にロリコン入ってたのか？」

「ええ、最近は阿良々木先輩がロリコンの中に入ってます」

「どういう状況だよ」

「あとちよつとで阿良々木先輩は完全なロリコンになります」

「僕をロリコンにしようとするな」

「でも実際阿良々木先輩ってロリコンですよね？」

「違うよ？」

「え？じゃあなんで私みたいなロリ体型の後輩と友達なんですか」

「お前が話しかけてきたんだろ」

「友達ということは否定しないんですか、悲しいです……」

「なんで悲しむんだよ」

「私は阿良々木先輩のこと恋人だと思ってたのに……」

「おいその言い方やめろ」

「今までの関係は遊びだったんですか!？」

「その言い方で叫ぶな!?!あと嘘泣きもやめろ!」

「くふふふ……阿良々木先輩、今からあの厨二病肉体的DV彼女から私に乗り換えませんか？私は阿良々木先輩のことをいじめないですよ」

「いじめてるだろ、お前は精神的DVだ」

「肉体よりはマシだと思いませんか？」

「どっちもどっちだろ……。それに僕は戦場ヶ原からいじめられてもいいと思ってる」

「キモっ」

「ガチな反応はやめてくれ……」

「くふふふ……いい反応ですね。やはり阿良々木先輩をからかうのは楽しいです」

「僕は楽しくない」

「は？私が阿良々木先輩のこと楽しませると思ってるんですか?」

「自己中すぎるだろ」

「自己中で何か悪いですか？私は地球温暖化対策のために節電するほど協調的じゃないんです」

「完全にクズの発言になってるぞ」

「クズで結構ですよ、どうせ私が地球温暖化対策しなかったところでまずいレベルまで影響が出始める頃には私達この世にいませんよ?」

「子孫には関係あるだろ」

「私子供作る気ないですし、阿良々木先輩の子なら産んであげてもいいんですけど……。どうですか?」

「どうですか？じゃねえよほんとにやってやろうか」
「もしもし……警察ですか？実は学校の先輩にセクハラされて……」
「おい、通報しようとするな」
「もしもし……戦場ヶ原先輩ですか？実は戦場ヶ原先輩の彼氏の方にセクハラされました……」
「おい！まじでやめろよ！」
「あ、こっちの方が嫌ですか」
「そりや、殺されないほうが殺されるほうよりましだろ」
「いじめられてもいいって発言どこ行きました？」
「殺されたくはない」
「じゃあいじめられるの嫌なんじゃないですか」
「お前にとって殺しはいじめの範囲なのか？」
「？当たり前じゃないですか」
「常識を持って」
「やだなあ……私ほど常識的な人はいませんよ」
「常識があるやつはそんなこと言わない」
「残念ながら私の常識ではそんなことを言うのが常識なんです」
「それは常識じゃない」
「案外常識かもしれないよ？間違っているのは阿良々木先輩かもしれない、そもそも常識は誰が決めたんでしょね？」
「常識ってのは……そりや多数決だろ」
「多数決ですか……くふふふ、よく少数意見も取り入れろとか言いますけど、なんやかんやされてないですよね」
「常識に少数意見を入れたら人殺しとか合法化されかねないから仕方ないだろ」
「でも人間って本能的に争うものですし、そう考えると人殺しつてのは案外少数意見じゃないかもしれませんよ？」
「じゃあ今頃人殺しは常識だろ」
「ふふふ……そうですね。では、私はいつか人殺しが常識の世界になることを祈っておきます」
「なら僕はならないことを祈っておくよ」

「もしなつたらこのカッターで阿良々木先輩の首を切つてあげますね」

「急にヤンデレになるな」

「阿良々木先輩は私だけの物……つてどこですか」

「実際お前僕のこと物扱いしてることあるだろ」

「そんなことないですよ？阿良々木先輩のことはちゃんと有機物扱いしています」

「知ってるか？有機物つて生き物以外にもあるんだぜ？」

「そんな常識知ってますよ。私阿良々木先輩と違ってバカではないので」

「何故僕を比較に出した」

「人間つて比較が好きですから」

「僕は嫌いだ」

「私は好きですよ？阿良々木先輩みたいな人と自分を比べることで優越感に浸ることができません」

「性格悪すぎだろ」

「でもみんなしてることだとおもいますけどねえ。阿良々木先輩もやったことありますよね？」

「否定はしない」

「くふふふ……それは良かったです。経験してなかったなら私は阿良々木先輩をすごいと思います」

「善人すぎてか？」

「馬鹿すぎて」

「僕全人類の中で最下位なほど馬鹿じゃねえからな？」

「そういえばこういうことを羽川先輩は思ったことがあるんですかねえ。あの超人にはしてほしくないものですが」

「してほしいじゃなくてしてほしくないなのか」

「あんな人間離れた存在にそんな人間臭いことされたら気持ち悪くないですか？超人は超人らしくしてなきや駄目ですよ」

「その言い方はどうかと思うが……羽川のやつは絶対そんなこと思わない。僕が保証する」

「くふふふ……なら阿良々木先輩が言うならそうなんでしょうね。さすが羽川先輩ってところですか」

「羽川はすごいやつだよ」

「阿良々木先輩と友達になれる時点ですごいですよねえ」

「なんでお前僕の間関係にそこまで突っ込んでくんの？」

「だって阿良々木先輩の間関係終わってますし？」

「終わってない」

「じゃあ男の友人言ってください」

「……………」

「くふふふ……女の友人しかない男子高校生ですか。少し……いえ、かなり性的な匂いを感じますねえ」

「まだしてない」

「まだ、ってことはやるつもりはあるんですね……というかまだ戦場ヶ原先輩とやってなかったんですか？」

「当たり前のように下ネタやめろ」

「んなことどうでもいいんです、やったんですか？」

「やってないって言ったろ」

「ふうむ、じゃあ私とやりますか？」

「唐突すぎるわ、セフレでももうちよつと段階踏むわ」

「私と阿良々木先輩の間にはもう踏む段階なんてありませんよ？」

「あるだろ、どう考えてももつとあるだろ、常識的に……いや、やっぱ考えなくていい」

「くふふふ……もし常識的に考えろって言ったら今この場で押し倒してたかも」

「言わなくて良かったよ」

「別に今ここで押し倒してもいいんですけど」

「戦場ヶ原に殺されるぞ」

「阿良々木先輩がですか？」

「そうだよ」

「今日私の家来ますか？」

「話聞け」

「大丈夫ですよ。私が舐めれば死んだ阿良々木先輩もちやんと蘇生できます」

「自分の舌に自信持ちすぎだろ」

「私の舌は万能ですから、怪我を治すことも人を騙すこともできます」

「二つ目のせいで一つ目の信用がまったくくないんだが」

「信じるか信じないかはあなた次第ってやつですよ？」

「じゃあ僕は信じないことにするから」

「信じられないですか？さっき見せたのに。阿良々木先輩って見たものは信じる人だと思ってたんですけど」

「僕が見たものは信じられるが、お前のことは信じれねえよ」

「私ってそんな信用ないですか？」

「逆にあると思ってるのか？」

「もし私を信じている人がいたら、私はその人の頭を疑いますね」

「自覚あるのかよ」

「え？阿良々木先輩私の言葉信じるんですか？頭大丈夫ですか？」

「僕はお前が言ってることを常に嘘って思わなきゃいけないのか？」

「違いますよ」

「なら良かった……はっ！」

「くふふ……信じてくれて嬉しいです」

「それは嬉しくないってことか？」

「どうでしょうね？私は嘘つきなので」

「クレタ人やめろ」

「阿良々木先輩もご存知でしたか、あれってなんでクレタ人なんですかね？日本人でもアメリカ人でも宇宙人でも阿良々木先輩でも関係ないですよ」

「僕がしってるわけないだろ。考えたやつがクレタ人に騙されてんじゃないか？」

「なら、阿良々木先輩にとって私はクレタ人ですか。そういえばクレタってどこなんですかね？」

「僕が知ってるわけないだろ」

「でしようね、もとから期待してないです」

「なら、なんで聞いた？」

「ときには可能性に賭けるのも大切ですよ？たとえ分の悪い賭けでも」

「言い方をどうにかしろ」

「くふふふ……残念ながらどうにもなりませんねえ」

「もう何も言わん」

「えー、つまらないので何か言ってくださいよ」

「お前さあ……」

「逆に阿良々木先輩が私を虐めてみたらどうです？」

「何故そうなる」

「恋愛において主導権を握ることは大切ですよ？くふふふ」

「恋愛じゃねえよ」

「男女の関係なんて基本恋愛みたいなもんです。男女の合間に友情なんてないんです。切なく儂いんです」

「急にどうした」

「くふふふ……ちよつと昔のことを思い出ただけです」

「ほお、お前の恋愛話は興味あるな」

「え？私恋愛したことないですよ？」

「昔のことどこいった？」

「昔のことって言っただけで恋愛のことなんて言ってないですよ、くふふふ……それに私は阿良々木先輩一筋なので」

「発言と発言が一致してないんだよお前」

「あれです。好きな子を虐めたくなるやつ」

「あの心理って女にも適応されるのか？」

「性差別ですか？阿良々木先輩」

「純粋な疑問だ」

「そうですか。その疑問に対する答えは、知るか、ですわねえ。私はエスパーではないので私以外の人の気持ちはわかりません」

「だろうな、もとから期待してない」

「なら、なんで聞いたんですか？」

「ときには可能性に賭けることも大切だろ。たとえ分の悪い賭けで

も」

「くふふふ……分が悪い賭けとはひどいですねえ」

「実際わかんないんだろ？」

「実は嘘で、知ってるかも」

「嘘つけ、クレタ人」

?

「どーも、阿良々木先輩」

「……お前がどこから出てきているのか僕はもう突っ込まないぞ」

「くふふふ、突っ込むようなものでもないですからねえ」

「で、急に話しかけてきて、なんのようだ？」

「理由なしで話しかけちゃ駄目なんですか？欲張りですねぼっちのくせに」

「……悪口言うのが理由なのか？」

「これはあくまで挨拶ですよ。意味的にはこんにちは、とかおはようとか、それと殆ど同じです」

「理不尽にも程があるだろ、ふざけんなよ」

「悪口ですか？酷いです」

「挨拶だよ」

「くふふふ、口が達者ですね。阿良々木先輩は」

「お前に比べたら全然達者じゃねえよ」

「褒めてくれて嬉しいです」

「ホントにな」

「ま、私の嘘をつかない口のことはどうでも良くてですね」

「その言葉に基づくと僕がぼっちってことになるな」

「事実ですよね？ところで、阿良々木先輩って男女差別反対ですか？」

「急に真面目な話になったな？まあ、そりゃ反対だけどさ」

「じゃあ男女平等賛成ですか？」

「まあ……そうだな」

「なるほど、阿良々木先輩は男湯とか女湯とかいららない、混浴しかいら
ないという主張の変態でしたか」

「さて、捉え方が曲解しすぎだ、ひねくれ過ぎだろ。というかどうして
急にそんな話してきたんだ？」

「ちよつと女性だからの悩みがあつてですね……」

「何かあつたのか？」

「ええ、エロ本が買いにくいんですよ」

「くつつつつつだらねえ!!」

「くだらねえとは失礼ですね、百合つてのは世界を救うんですよ、それが買いつらいなんてとてもとても辛いことです」

「くだらねえよ、まず18歳以下がエロ本買うな」

「え？神原さんはBL本……」あれは例外だ」

「理不尽ですね。ちなみに私は百合の合間に挟まる男が嫌いなんですよ。殺したいくらい」

「そうか」

「というわけでヴァルハラコンビという百合の合間に挟まりやがった阿良々木先輩のこと殺していいですか」

「待て、早まるな。違う、カッターをカチャカチャするな、というかアレは百合コンビじゃないだろ、スポーツのコンビだろ」

「私が妄想すれば、全部百合コンビですよ？そんな百合コンビを破壊して、私が百合成分を摂取できなくさせやがって」

「理不尽だ！そもそもヴァルハラコンビは一時期破綻されていたはずだ！僕は関係ない！」

「阿良々木先輩殺したら百合成分取れそうなんで殺していいですか？」

「それで取れるのは阿良々木暦成分か、ヤンデレ成分だけだ!?というかそんな百合成分欲しいなら神原とでも百合百合してこい、お前多分あいつの好みぴったりだぞ？」

「くふふふ、私は見る専門ですから、というか、それじゃ私が百合の合間に挟まる女になっちゃいますし」

「そういうもんなのか」

「そうですねよ、なので月2回くらいのペースで神原先輩と寝ています」「がつつりやっつてんじやねえか、さっきの発言どこいった？」

「仕方ないじゃないですかあつた当日に誘拐されたんですから」

「神原の奴何やってんだよ？え？まじで何やってんの？」

「そのとき私の初めては奪われたんですよ」

「おいやめろ、体モジモジさせんな」

「友達の家に行くという初めての経験を……」

「ただのぼつちじゃねえか!!人のこと言えねえだろお前！」

「ぼつちなんて……いじめですよ？阿良々木先輩」

「ならさっきのいじめだよな？」

「いじめっていじめと感じたらいじめなんです。あのときの阿良々木先輩はいじめと感じてないのでいじめではありません」

「それよく言われるけど理不尽だよな」

「阿良々木先輩喋らないでください、いじめですよ？」

「本当に理不尽だな！この考え」

「人生理不尽ですからね」

「深いこといって逃げようとするな？許さねえからな？」

「ごめんなさい……許してください……」

「上目遣いっていう女の武器使うな、やめろ。許したくなってくる」

「今の時代、そういうこと言うと言つて虚無から男女差別とか飛んできますよ？」

「虚無ってなんだ、虚無って」

「虚無は虚無です。当事者でもないのに文句言ってくるやつのことです。良くいますよね。私は虚無って呼んでいます」

「そ、そうか」

「くふふふ、当事者でもないのになんでそんな文句言いたがるんですかね？」

「疲れてるんだろ。文句言うぐらいでしかストレス発散できないんだよ」

「自己中ですよねえ、阿良々木先輩にしかストレスをぶつけてない私を見習ってほしいです」

「僕をストレスのはけ口にしてんじやねえよ」

「まあ、ただの冗談ですのでご安心を」

「ああ、うん。そうだな」

「あ、今、なら悪口を言うなよって思いましたね？悪口は私が言いたいので言います」

「自己中にも程があるだろ」

「くふふふ……ま、そんなことどうでもいいですね。話を戻しましよ

う。阿良々木先輩は男女差別反対ですか？」

「何処まで戻ってるんだよ、お前こそどうなんだ？」

「男女差別は反対しときます。その方が虚無から何も言われな
いで」

「じゃあ男女平等は？」

「賛成ですよ。阿良々木先輩一緒にお風呂入りましょう？」

「戦場ヶ原に殺されるからやめてくれ」

「阿良々木先輩……頑張ってください！」

「頑張ってください！じゃねーよ、その無駄にきれいなサムズアップ
やめろ」

「サムズアップのコツは少しだけ斜めにする事です」

「なんの話？」

「……？日本語不自由ですか？」

「この世界は理不尽だ!!」

「くふふふ……また、話がずれてますね。えーと、何処まで戻りまし
うか？」

「戻らんでいい。何か新しいことを話すべしだ」

「新しいこと……阿良々木先輩は人は死んだらどうなると思いますか
？」

「急に哲学的すぎる」

「私は……別世界に転生すると予想します」

「ライトノベルか？」

「でも有り得ない話ではないですよ？結局それを確認する方法はな
いわけですから」

「まあ、そうかもな」

「有り得ないとは言いつれない以上存在する可能性はある。くふふふ
……ロマンチストとしては存在してほししいものです」

「異世界な……行ってみたいのか？」

「いーえ、別に、この世界も楽しいですから。この世界に入れるだけ満
足というものです」

「そんなもんか」

「ええ、でも阿良々木先輩がいるならその異世界も悪くないかもですねえ」

「僕はこの世界にしかないぞ」

「そうですか、私はこの世界以外にもいるかもですね、くふふふ」

正夢

「起……て……さ……阿良……木先……、起きてください、阿良々木先輩。」
「ああ、起きました？それとも起きてました？起きてたんならムカつきますね。」

「え？……ここは何処かって？くふふふ……さあ、どこでしょうね？教室かもしれないですし、町かもしれないません、もしかしたら外国かもしれないません。」

「真面目に答える？そうですね、強いて言えば夢の世界とかどうでしょう？ゲームの世界みたいです。」

「言わゆる明晰夢ってやつです。きっと起きたときも覚えてますよ。」

「知ってるかもしれないませんが明晰夢って夢の中を思い通りにできるらしいですよ？」

「例えばここをいつもの教室にしたり、時間を変えて夜にしたり、阿良々木先輩が女の子になったり。」

「くふふふ……流石に最後のは悪趣味ですね。あ、女の子の阿良々木先輩も可愛いですよ？」

「嬉しくない？戻せ？残念ですねえ、あ、戻りたいなら阿良々木先輩が願えば戻りますよ。」

「何せここは阿良々木先輩の夢の世界ですから、私含めて阿良々木先輩は好き勝手にできます。」

「例えば、私にどこかのメガネさんみたいに猫耳を生やしたり、バニー服を着させたり、着物を着させたり、金髪にしたり、髪を伸ばしたり、狐耳を生やしたり、あ、猫耳は消さないですよ。」

「くふふふ……触りますか、この尻尾と耳、とてももふもふしていますよ？」

「触りたいですか？触りたいですよ？触らせてあげましょう、何せ私は阿良々木先輩に好き勝手される立場。いわば奴隷ですから。」

「んっ……触り方がいやらしいですね……くふふふ……上手ですよ。」

「気持ちいいなら良かったです。あ、ここで終わりですよ体験版はここまでです、製品版をご購入ください……なんて。」

「え？ここから出る方法ですか？そうですね……阿良々木先輩が起きたら出られますよ、それまではご自由どうぞ。

「どうやれば起きれるのかって？そりゃ、目覚めればですよ？逆に言えばは目覚めなければ一生このままですね。

「一生一緒ですよ、なんてロマンチックなんでしょう。

「え？ロマンチックじゃない？ふむ……価値観の違いを感じます。

「ま、阿良々木先輩は吸血鬼もどきですが、一応人間です。

「いつかは目覚めますよ。植物状態ってわけでもないですし。

「植物状態って夢見れるんですかね？自分で言っておいて不安になつてきました。

「まあ、いいです。どうでもいいことですし。

「取り敢えず阿良々木先輩は目が覚めるまで、好きなことをしまくっちゃいましょうよ、せつかくの何でもできる世界ですから。

「くふふふ……もちろんえっちなこともやりたい放題ですよ。

「ここは阿良々木先輩の夢の世界。だから阿良々木先輩が命令すれば私は何でもしましょう。

「何もしない？もう、身持ち硬いですね。ここには戦場ヶ原先輩も入ってこれませんよ……夢なので現実にも影響しません。

「くふふふ……それでもですか。なら私は諦めましょう。

「え？戦場ヶ原先輩のことを願っても出てこない？

「もしかしたら望んでいってるだけかもですよ。

「自分の心なんて、わかりづらいものですし。

「え？もう寝る？はあ、仕方ないですね。

「ベットを願えば出てきますよ……おっとクイーンベットですか？もしかして誘ってます？

「とうか、枕ないじゃないですか？もしかして枕使わないタイプ？

「あ、私の尻尾を使わせると、それを含めてクイーンベットなんですか？仕方ない人ですね。

「んくっ……気持ちいいですか？

「気持ちいいですか。嬉しいです。自慢の毛並みなんですよ。

「え？周り明るくて寝れない？あなた吸血鬼ですよ？夜行性ですよ

ね？

「じゃあ、これでどうですか？二本目の尻尾生やしました。

「あ、息できない？そうですか、もうめんどくさいので願ってください。

「おお、真つ暗……えつちな雰囲気ですね。

「えつちじゃないですか？でも今の体制、傍から見たらシツク……

「あ、だめ？この小説が十八禁になる？

「いいじゃないですか十八禁、大丈夫です、この世にはそういうサイトがある……もう十八禁の向こう側へ飛んでいきましよう。

「駄目ですか、ホント身持ち固いですね……ハーレムには向いてないです。

「まあ、阿良々木先輩にもちゃんとそういう知識があつて良かったです。

「そういう知識ないと、戦場ヶ原先輩のとき困りますよ？

「くふふふ……教えてあげましょうか？

「もちろん、阿良々木先輩の体で。

「うん？ネットで調べるから平気？

「まったく最近の若者は。調べ物で図書館を使うのはもう昔の話ですか。

「あ？私の方が阿良々木先輩より年下？

「くふふふ……くふふふふふふふ、もしかしたらそんなことないかもしれません。

「実は598歳と11ヶ月かもしれないし、0歳かもしれません。

「本当は？ですか、くふふふ……女の子に歳を聞くのはマナー違反ですよ、阿良々木先輩。

「覚えておいてくださいいね、痛い目にあいますよ？

「いや、もうあつてたりします？

「存在が痛いですからね。

「厨二病こじらせてますし、全く吸血鬼もどきなんているわけないのですから。

「え？もう寝る？頑張ってください、私は妨害しますのです。

「なんで？妨害するんだ、だって？」

「それは、もちろんおもしろ……じゃなかった、実は明晰夢の中で寝ると死んじゃうらしいですよ？」

「嘘付け？嘘じゃないですよお、だから阿良々木先輩起きてください！」

「あ、ちよ!?!ちよつと!?!尻尾強く握らないでください!んっ……そこ敏感なんですよお……!」

「あ、そこは絶対だめです。尻尾のつけ根はケモミミっ娘的にアウトです。触ると発情しちゃいます。」

「発情したら、阿良々木先輩のこと襲っちゃいます。」

「流石にこんなん卒業するのはいやですねえ。」

「あ、阿良々木先輩がそれを願うならどうぞ、喜んで発情します。」

「ああ、いらない？てか当たり前のように寝ようとしないうくださいよ。」

「さっきまでの話忘れてました？」

「え？『僕はいつになったら目覚めるのか』って？」

「さあ？私が許可したらでしょうか？」

『僕の目覚めを邪魔しないでくれ』？

「くふふふ……私は邪魔してませんよ。」

『僕の夢から消えろ』？

「ちえっ、そう言うなら仕方ありません、私はあなたの夢では逆らえないので。」

「その勘の良さを恋愛にも活かして……いえ、なんでもないです。」

「では、阿良々木先輩おやすみなさい……いい夢を。」

「お……く……あ……せ……!起きて……さい……良々木先輩!」

「うっ……ここどこだ?」

「ああ、起きました?それとも起きてました?起きてたんならムカつきますね。公園です。なんでこんなところで寝てるんですか」

「……なんで僕公園で寝てるんだ?」

「質問に質問で返さないでください……あれじゃないですか？ロリ見てたら寝落ちしたとか」

「僕はそんな変態じゃない……ふわあ、なんか変な夢だったな」

「えっちな夢ですか？」

「ちげえよ、でもお前が出てきたな」

「おっ？もしかしたら阿良々木先輩は私のことを心の奥底で望んでい
るのかもしれないねえ」

「心の奥から出てくることはないだろうな」

「くふふふ……望み続ける、というのはそれでロマンチックで
すよ」

「お前のごと望んでも叶わないし」

「……え？何ですか告白ですか？叶いますよ？受け入れるので」

「お前尻尾生えてないもん」

「……………へ？尻尾？なんのことですか？」

「ああ……いや、なんでもない。僕もう帰るわ」

「あ、そうですか。さようなら」

「くふふふ……褒められた、今日はしっかりブラッシングしとこ」

お昼休み

「どうも阿良々木先輩。暇なんで来ました」

「今日はたまたま戦場ヶ原がいないからいいけど、今度から昼休みには来るな。僕が殺されるから」

「さようなら、阿良々木先輩。来世でまた会いましょう」

「僕の命を諦めるな、来ることを諦めろ」

「いいじゃないですか。どうせ一緒にお弁当が食べれるのが戦場ヶ原先輩か羽川先輩か神原さんしかいないのに、戦場ヶ原先輩は休み。羽川先輩は先生に呼び出されて、流石に後輩を自分からお弁当一緒に食べようって誘うのはなあ……って思ってしまい、お弁当を一人さみしく教室の隅で食べるか、便所で食べるかどつちがマシなのか考えてたんでしよう?」

「そ、そ、そんなことねーし?」

「隠さなくていいんですよ阿良々木先輩。私はあなたのことならたとえクラスに友人が二人しかいないこととか、未だコミュ障なこととか全部受け入れますから」

「受け入れていい。その慈愛と悪意で満ちた目をやめろ」

「違います慈愛49.9%と悪意50%とほんのちよっぴりの愛情0.1%です」

「悪意のほうが多いじゃねえか」

「これで人間が錬成できます」

「性悪説すぎるだろ。生まれたときから50%かよ、ロクな人間できねえよそれ」

「ほんのちよっぴりの愛情が頑張るのです」

「ほんのちよっぴりでどうにかなる問題か?それ」

「ちなみに私の構成は悪意99%と慈愛1%です」

「悪意増えたし、ほんのちよっぴりの愛情負けてんじゃねえか!」

「親から愛情をもらえなかつたんですよ」

「反応に困るから突然厄ネタを打ち込むのやめろ」

「私が親からもらえるはずだった愛情は性行為への愛情に変わったん

ですよ」

「うん、だからやめろ？」

「誰も私を見てくれないんです！」

「声を大きくするな、周りから変な目で見られるから」

「まあ、嘘なんですけど」

「うん、知ってる」

「ご安心を、私と親との関係は良好ですし、ネグレクトなどは受けていません。親同士の関係も良好です。夜にしっかりと愛を育んでます」

「お前今すっげえ最悪なこと言った自覚ある？」

「弟ですかね？妹ですかね？」

「自覚はあるみたいだな。ならそういうことを言うのをやめろ」

「別に阿良々木先輩のクラスでこういうことを言うことで阿良々木先輩を孤立させようとか思ってますんよ」

「やめてくれ。ただでさえ孤立してんだぞ」

「べ、別に阿良々木先輩をクラスで孤立させるためなんかじゃないんだからねっ！」

「ツンデレが嘘ついたらただのツンだ。ただのいじめだろそれ」

「一対一なんで喧嘩です」

「いじめは被害者がいじめと感じたらいじめらしいって僕はとある後輩から聞いたことがあるんだが」

「本道理不尽ですよ。ギリギリを狙えないじゃないですか」

「まずギリギリを狙おうとするな」

「まあ、ともかく今日はひとり寂しくお弁当を食べようとしてた惨めな阿良々木先輩に気づいたこの私と一緒に阿良々木先輩とお弁当を食べあげます。さあ、便所へ行きましょう」

「トイレから離れるよ。ていうか一緒に入れねえよ性別考えろ」

「性差別ですか？」

「性区別だ。社会のルールだ」

「知ってます？ルールって壊すためにあるんですよ」

「知ってるか？ルールって守るためにあるんだよ」

「ではルールに則って多目的トイレを使いましょう。あそこなら阿

良々木先輩が警察のお世話にならないでしょう」

「本来の目的で使ってもらえない多目的トイレが可愛そうだよ」

「多目的トイレの本来の目的……？ああ、セ」それ以上は言わせねえぞ！？」

「あ、違いました？」

「もはや多目的トイレに失礼だろ。脳内ピンクやろうが」

「やろうじゃないです。女です。あと神原さんよりは脳内ピンクじゃないです」

「あいつの頭と同レベルだよ」

「そんなことないです。あの人の脳内は薔薇と百合が咲き誇ってますけど、私の中は百合だけです」

「人はそれをどんぐりの背比べと言うんだよ。覚えておけ」

「阿良々木先輩と私の身長みたいなもんですか」

「違う。僕はそこまで小さくない」

「くふふふ、小さい自覚はあるんですね。今身長いくつなんですか？」

「企業秘密だ」

「その企業どうやれば入社できますか？」

「お前は絶対に無理」

「えー、私のお弁当の卵焼き一個でどうですか？」

「賄賂かよ。しかも少ねえ」

「阿良々木先輩の身長なんてどうでもいい情報卵焼きで十分です」

「なら何故聞いた」

「なんとなく？そもそも知ってますし」

「なんと……おい、待てなんで知ってたんだよ」

「身体検査のやつを保険委員の方にちよっと頼んで見せてもらいました」

「個人情報！個人情報だぞそれ！」

「人間欲深いですからねえ」

「賄賂か!?いくらだ!?いくら払った!？」

「さ、お弁当食べましょう。昼休み終わっちゃいますよ」

「おい逃げるな。マジでお前何やっての？賄賂って犯罪だからな？」

「人間悪意50%ですから……ちよつと誘惑すればイチコロです。人なんてそんなもんですよ」

「僕はもつと人を信じたい！人類の可能性に賭けたい！」

「そうですか。ところで私阿良々木先輩の身長ついでに、戦場ヶ原先輩のスリーサイ「いくらだ？」」

キャラ付け

「阿良々木先輩。私って何枠なんですかね？」

「唐突になんだ。まずなんの枠だ」

「やだなあ、枠といつたらそりやあもう阿良々木先輩を主人公にした際のキャラの要素のことに決まってるじゃないですか」

「どういうことだよ」

「例えば、戦場ヶ原先輩だよヤンデレ枠ですね」

「何が言いたいのかだいたいわかったけど、戦場ヶ原をヤンデレと言っているのか疑問だ」

「確かに、ただツンデレというのはまた違う気がしますし……S枠……もしくはメインヒロイン枠？」

「僕としては後者を肯定したい」

「では、羽川先輩は負けヒロイン枠ですね」

「さて、羽川にそんな不名誉な称号をつけるな。ならS枠のほうがいい」

「まあ、阿良々木先輩の三角で収まらない関係はおいといて、私って何枠なんですかね？」

「変態枠」

「それじゃ神原さんとキャラ被りじゃないですかー」

「お前今神原にだいたい酷いこと言ってるぞ」

「阿良々木先輩に言われたくないです。神原さん変態枠じゃないなら何なんですか」

「スポーツ枠とかあるだろ。……一応」

「スポーツ枠は火憐ちゃんなイメージあります」

「あいつは超人枠」

「ドラゴ○ボール枠？」

「やめろ。やめなさい」

「はあ、さつきから話題飛びっぱなしですね。一旦閑話休題しましょう。私って何枠なんですかね？」

「S枠……は戦場ヶ原だもんな。そうだな……後輩枠とかじゃない

か」

「私が阿良々木先輩ごときに対して先輩とつけるのは形式上であつて、別に尊敬してわけじゃないですよ？勘違いしないでください」

「え？そうなの？普通にシヨツクなんだけど」

「だってロリコンでシスコンの男の後輩とか変態みたいなじゃないですか」

「それは言い返せないが、お前は確実に変態だ」

「ロリコンとシスコンの部分を否定してくださいよキモ良木先輩」

「僕は変態だが、そんな名前はしていない。僕の名前は阿良々木だ」

「失礼、噛みました」

「違う、わざとだ」

「だまれ」

「唐突の裏切り!?!」

「世界は残酷なんですよ!」

「急にどうした!?!」

「うるさい、だまれ」

「世界残酷すぎない?」

「んまあ、そんな常識はおいといて、いい加減話を戻しましょう。このままだと私は個性のないモブになってしまいます。何かしらキャラをつけなければいけないにや」

「そのキャラ付けは確実に間違っていると思うが、取り敢えず、斜め七十七度の並びで泣く泣く嘶くナナハン七台難なく並べて長眺めつて言ってくれないか?」

「にやにやゝっ!?!……コホン、失礼、噛みました」

「……今のマジだよな?」

「違います。わざとです。勘違いしないでください。このぱーふえくとな私が早口言葉ごときで噛むわけないじゃないですか。でもにやは流石に雑すぎるのでここらへんでやめようと思います」

「言い訳早口すぎだろ。なんでそれ言えて斜めの時点で噛むんだよ」

「ところで、どうやってキャラ付けすればいいですかね?」

「露骨に話題そらしたな?というかキャラ付けする意味ないだろ。お

前十分濃いわ」

「じゃあ、私は何卒なんですか？」

「……謎のヒロイン枠とか」

「謎のヒロインって基本的にちよろいか、天然かなんで嫌です」

「キャラ付けを拒否するな」

「嫌なら仕事でも命令でも断っていいってじつちゃん言っていました」

「格言みたいに言ってるけど、それただの駄目人間だよな？ 格言みたいに言えばなんでも正論になるわけじゃないからな？」

「友達を作ると、人間強度が下がるから。これは私の知り合いの格言です」

「ごめんなさい！ やめてください！」

「くふふふ…… 黒歴史はなかなか消えませぬえ」

「逆にお前に黒歴史とかないのか？」

「レイプされた話をとかどうですか？」

「うん、多分冗談だと思うけど急にそういう話するのはやめような、反応に困るから、どうすればいいかわかんないから、何も言えないから」

「会話は友好関係の第一歩ですよ？」

「初対面でんな話するやつと友達になりたくねえよ」

「初対面で会話しないやつよりはマシじゃないですか？」

「同レ…… いや、一個上だ、うん。もちろん悪い意味で」

「だから私はぼっちなんですかね？」

「その話を初対面でぶっ放したなら確実にそれが原因だ」

「自己紹介でレズだと言っただけなんですが……」

「お前がぼっちな原因がわかったし、お前が神原に狙われた理由もよくわかった」

「阿良々木先輩がぼっちな理由は自己紹介のときにロリコンを告白したからですか？」

「自己紹介でそんなこと言ったらぼっちどころじゃねえわ」

「じゃあなんでぼっちなんですか？」

「的確に傷をえぐってくるな……もう僕はぼっちじゃないからな」

「男の友人いましたっけ？」

「いないけど、女子に友達いるから」
「それを人はハーレムって言うんですよ？」
「世の男子の憧れじゃないか」
「あれリアルだと正直引きません？」
「ちよつとわかるけどさ、憧れるものは憧れるんだよ」
「阿良々木先輩はそんな状態なんですね。そりや友達できませんね」
「いや、ハーレムじゃねえし。友達だし」
「男女間に友好関係は生まれません」
「そんなことないだろ！」
「えー、戦場ヶ原先輩は彼女、羽川先輩は元カノ、神原さんは下僕、撫子ちゃんは妹の友人、八九寺ちゃんは阿良々木先輩からの一方的な好意、この中に友人います？」
「色々突っ込みたいたいんだが、突っ込みどころ多すぎてどこから突っ込めばいいかわからん」
「私がないことを突っ込んではどうでしょう」
「はっ！なんでお前はいないんだ？」
「それは阿良々木先輩のこと私はloveの方で見えますから」
「うわあ!?!急にデレるな気持ち悪い!!……がはあっつ!?!」
「次は本気で殴りますよ」

無思考

「友達と恋人の境界線って何処なんでしょうか？」

「どうした急にこんな校舎裏に呼び出して。そして何を言っている」

「いえ、少々疑問に思いました。どう思います阿良々木先輩？」

「いや、告白してるかしてないかの違いじゃないのか？」

「でも私と阿良々木先輩は告白してないのに恋人じゃないですか」

「違う。記憶を捏造するな」

「照れないでくださいよ阿良々木先輩。こんなかわいい娘が彼女ですもんね、気持ちはわかりますが」

「照れてないお前は僕の彼女じゃない、そしてお前のその容姿への自信はどこから湧いてくる」

「最近彼氏と別れたらしい私の友人を見てると湧いてきます」

「お前今とんでもなくクズな発言したぞ」

「安心してください、友人との関係は良好ですよ。彼氏にフラレたとき慰めてあげるくらいは相思相愛です」

「なおいわ。せめて嫌ってろ」

「私の自己肯定感を上げてくれる存在を嫌う必要ありますか？」

「どうしよう。僕の友人はどうやら思ったよりクズだったらしい」

「おや、こんなクズな私を阿良々木先輩はどうやら友達だと思ってくださってたようで……くふふふ、嬉しくて涙が出そうです」

「僕は今日一人友人を失って悲しくて涙がでそうだよ」

「ほう、つまりその友人は彼女に成り上がったと」

「違う。僕が告白した記憶を捏造するな」

「阿良々木先輩こそ告白してないって記憶を捏造しないでくださいよ」

「え？もしかして僕が告白してないって記憶を捏造してるの？間違ってるのこっち？」

「くふふふ……昨日の放課後何をしてたか思い出してみてください」

「昨日の……放課後」

「ちなみに私は先程の友達を振った元カレさんと校舎裏にいました」

「昨日の……おい、待て何してるんだお前!？」

「あ、誤解しないでくださいよ。私じゃなくて向こうが呼んだんですよ?。」

「そういう問題じゃない」

「ご安心をしっかりと断っておきました。私は阿良々木先輩のことが好きってしっかりと誤解のないように言っておきました」

「痴情のもつれに僕を巻き込まないでくれないか」

「やだなあ、もつれてませんよ私は阿良々木先輩一筋ですから。彼は私に近づくためにあの友達と付き合ってたみたいですけど。あ、阿良々木先輩こういうのがまさに痴情のもつれです」

「ただただ友人が可哀想な話になってるんだが?」

「まあ、彼女も私の慰めによつて元氣取り戻してますし?ちよつとやりすぎて彼女が私を見る目に少々性欲が混ざるようになった気がします。ですが気のせいですよね!。」

「もつれてる!もつれまくってる!この弱みに付け込むクズめ!」

「ひどいですね!そんなつもり無かつたんですよ!」

「犯罪者はみなそう言うんだ!」

「どうしましょうかねえ、あれ……これで振っちゃうと私が誘っておいて捨てたクズになっちゃいますよねえ」

「どつくのとうにお前はクズだよ」

「別に私もそこまでやるつもりじゃなかったんですよ?元氣づけるついでに便利なようにちよつと私に依存させようとしただけで」

「どうしよう。こいつ思った百億倍クズだった」

「私の評価案外阿良々木先輩の中で高かつたんですね」

「自覚あるのたち悪いわ」

「分かりました!ここはあの元カレを阿良々木先輩にぶつけてバランスを取りましょう!」

「何を分かつたんだ。何のバランスを取ろうとしてる」

「大丈夫ですよ。まだ彼女自分が抱いてるのが恋心とわかってないみたいですし、気づく前に逃げます」

「何も大丈夫じゃない」

「時効ってやつです。別れたあとに『あ、私って……彼女のこと好きだったんだな……』ってモノローグが流れるやつです」

「ただの負けヒロインじゃねえか」

「実際負けヒロインですよ？私にとって阿良々木先輩が勝ちヒロインです」

「勝手に僕をレースにエントリーしないでくれ。あと僕をヒロインにするな」

「阿良々木先輩はヒロインですよ？ひねくれツンデレめんどくせえヒロインです」

「僕の人生の中で一番酷い悪口かもしれない」

「私もヒロインなのでヒロイン×ヒロインで百合ですね」

「その理論はおかしすぎる」

「まあ、ここまで話してきたことのほとんどが嘘なんですけど」

「ほとんどってことは何個か本当のことがあるってことか、おい」

「例えば私が友人を見ることで自己肯定感を上げてることとか」

「よりによってそこか？」

「彼女がフラれたこととか彼女の私を見る視線に少々性欲がまぎってることとか」

「おい」

「ほーかーにーはー、昨日私は彼女の元カレと校舎裏にいたこととかあ」

「おい、ほとんど真実じゃねえか」

「いーえ？しつかりと真実も含まれていますよ？例えば私が阿良々木先輩に元カレくんをぶつけようとして

ることとか」

「ん？」

「阿良々木先輩がひねくれツンデレめんどくせえヒロインなこととか」

「おい」

「実は元カレくんの目的は私ではなく阿良々木先輩で、阿良々木先輩の友人である私を通して阿良々木先輩と仲良くなるために私に近づ

ハッピーバレンタイン！

「あ、阿良々木先輩……ちよつといいですか？」

「ヒッ!？」

「なんですか、その反応。まるで肉食獣にあつたみたいな反応」

「お前が、弱気な後輩係女子みたいな言い方で僕を呼んでくるからだ！なんだ!?!何を企んでる!？」

「失礼ですね。チョコ渡そうってだけですよ」

「なんで急にチョコなんだよ」

「今日バレンタインですよ？忘れてました？非モテな阿良々木先輩らしいですね」

「………僕には程遠いイベントだと思つて忘れてた」

「はあ、可哀相ですね。そんな残念な阿良々木先輩に私から本命チョコかつこ税込百十円かつことじのプレゼントです」

「カツコの中言う必要ないだろ。たとえ本当に本命チョコでも安く見えるわ」

「大切なのは気持ちですから」

「お前が言うことじゃねえよ!」

「ご安心を、しっかりと気持ちは込めましたから!これを作った週三でパートでお菓子工場で働いてるおばちゃんが」

「遠距離恋愛にも程があるわ」

「くふふふ……ただの冗談ですよ。しっかりと気持ち込めましたよ。

ああ、なんで私は阿良々木先輩のために百十円もお金を使わねばならないのだろう、と」

「ただのケチじゃねえか」

「まあ、これ一個で数千円のチョコが返つてくると考えたら問題なしですよ」

「あれ?僕ホワイトデーにお返ししなきゃいけない感じ?これの数十倍の値段のチョコ買わなきゃいけない感じ?」

「期待してますよ。私は甘味と値段にはきびしいですからね」

「値段は優しくしてくれ」

「ケチ」

「お前が言うな！」

「私からすれば百十円は十分すぎるくらい大金なんですよ」

「お前んちの家計大丈夫か？」

「阿良々木先輩にとっては話ですよ？」

「お前の中で僕の家計は大丈夫なのか。あとこの板チョコなんも入ってないよな？」

「真心しか入ってないですよ？」

「工場のおばちゃんの真心な。あむっ……辛いんだが？」

「おばちゃんの真心ですね。またの名をデスソース」

「おばちゃん毒舌すぎるだろ。辛すぎて舌が痛いんだが？」

「水飲みます？トドメに用意しておいたんですよ」

「一応僕も辛さに対して水が逆効果って知ってるからな」

「豆乳飲みます？」

「なぜ豆乳、そこは牛乳だろ。なんで微妙にズレてんだよ」

「阿良々木がヴィーガンである可能性も考えまして」

「全くそんなことないから安心しろ。あと豆乳よこせ」

「どうぞ、炭酸豆乳です」

「おう……ちよつと待て炭酸豆乳ってなに？」

「炭酸豆乳は炭酸豆乳です。それ以上でもそれ以下でもない。炭酸豆乳です。税込二百円です」

「なんでズレてるのをさらに外すんだよ！しかも税込二百円ってこのチョコより高えじゃねえか！」

「ホワイトデーのお返し期待してますね」

「……何炭酸が欲しいんだ」

「ホワイトデーなので白濁液の炭酸をお願いします」

「普通にカル〇スサイダーって言えば。意味もなく深読みさせるな」

「あ、阿良々木先輩」

「なんだ？」

「さつきも言いましたけど、私甘味と値段には厳しいので！」

「カ〇ピスサイダーに高級もくそもあるか！全部一律だよ！」

「最低ラインは五千円です」

「純粋に高い。転売ヤーでもそこまで強気な価格設定はしないだろうな」

「では、弱気に設定して阿良々木先輩の全財産でどうでしょうか」

「いくら僕でも全財産五千円以上はあるわ!」

「チエツ、じゃあ四千九百九十九円ですうでしょうか」

「スーパールのチラシじゃねえんだぞ」

「じゃあ、ここは妥協してカル〇スにします」

「そこは妥協する場所じゃないな」

「じゃあ、ここ阿良々木先輩の真心入りカ〇ピスサイダーでうわきつつ、阿良々木先輩流石にきついですよそれ」

「男の真心がきついのは同意するが、勝手に脳内で想像して勝手に引かないでくれないか?」

「いえ、デスソース入りカ〇ピスサイダーのことなんですけど」

「それは確かにきつい。そしてデスソースは真心じゃない」

「じゃあ、真心とは何なのでしょうか!?!」

「最低でもデスソースではないのは確かだな」

「じゃあ、デスソースとは何なのでしょうか?」

「落ち着け、デスソースはデスソースだ」

「デスソースはデスソースだった…?!?!」

「当たり前だ。どんだけ取り乱してんだ。なんでそんなデスソースが真心であると自信持ってたんだ」

「だってお母さんが『真心ってのはね。真剣に作れば勝手に入るのよ。覚えときなさい』って」

「どこにもデスソース要素がない」

「デスソースをお父さんの弁当にぶち込みながら言ってたので」

「複雑な家庭環境なんだな」

「ええ、羽川先輩と同じくらい」

「全国のネグレクトを受けた子供に謝れ」

「さて、茶番はここまでにしましょうか」

「随分長い茶番だな。多分本編三百文字もないぞ」

「まあ、私も鬼じゃないです。哀れな阿良々木先輩に送る真心入りのもあるんですよ」

「ほう、今度何か入ってたりしないんだな」

「ええ、ご安心を……これです」

「おお！ハート型のプレゼントボックス！バレンタインっぽい！」

「こちら、真心入り真心です！阿良々木先輩ハッピーバレンタイン！」

「ただのデスソースじゃねえか!!!!」

愛とは？

「阿良々木先輩、愛ですよ愛」

「急にどうした？」

「愛は世界を救うんですよ」

「本当にどうした？」

「愛は偉大です、美しいんですよ」

「話聞け」

「そんな愛の素晴らしさを阿良々木先輩に説いてあげましょう」

「拒否権を行使する」

「拒否権の行使には五百ジュエル足りません。税抜き五千円で購入しますか？右矢印はいスラツシュいいえ」

「ソシヤゲ始まったな。誰が払うか」

「では、愛の素晴らしさについて語らせていただきます。ではまず愛というのは何なのか、ということから始めましょう」

「普通に昼食を食べさせてくれないか」

「愛を知らない阿良々木先輩に教えてあげましょう」

「僕は怪物か何かか？」

「愛というのはですね」

「愛というのは？」

「性欲です」

「思ったよりくっだらねえ話みたいだな」

「阿良々木先輩のようなどーてーさんは勘違いしがちなんですが、世の中性欲なんですよ」

「そんなことない」

「真実の愛なんてものは存在しません。あるのは正直な性欲です」

「真実の愛に謝りなさい」

「阿良々木先輩、人はなんで人を好きになると思いますか？」

「いや、知らんが」

「簡単ですね。セ〇クスしたいからです」

「ここが教室ってことにお気づきでない？」

「そして人が人を好きになるのを人は愛と呼びます。つまり性欲は愛なのです」

「違う」

「愛というのはふ〇つくしたいということなのです」

「コンプライアンスに気を使ったのかもしれないが、一ミリも隠せてないからな」

「じゃあ、もう隠さなくていいですかね？」

「待て、開き直るな。すでに教室中からえげつない視線もらってるんだよ」

「つまりここで私が『阿良々木先輩……昨日は……すごかったですね……』って言えば阿良々木先輩の人生を破滅させれると」

「やめろ、やめてくれ。戦場ヶ原に何されるかわかったもんじゃねえ」

「世間体より戦場ヶ原先輩の心配ですか？くふふ、愛ですねぇ」

「申し訳ないが、これは愛ではないと思う」

「まあ、ご安心をすでに破滅している阿良々木先輩の人生を壊すほど私は鬼畜ではないので」

「なら取り敢えず食事中に下品な話をしないでくれるかな？」

「やー、です」

「可愛く言ってもだめだ」

「にやー、です」

「ちよつと揺れ動いたけどだめだ」

「かー、ペッ」

「やめなさい」

「まどめると愛というのは棒を穴にふあつくしてにやーすることなのですね」

「教室から追い出してやるぞお前」

「阿良々木先輩。私は女ですよ？」

「そういうの武器にするやつ僕は嫌いだ」

「阿良々木先輩。私は……私ですよ」

「ネタ切れを無理やり誤魔化そうとするな」

「正直最近話す内容がないんですよ。さっきの愛の話も図書室にあっ

た本から引用しただけですし」

「あんな極論を搾り取って出てきたような極論が乗った本とか滅茶苦茶気になるんだが」

「タイトルから凄かったですよ。『ブラストホッパー倉木』って本なんですけど」

「なんだその、確実に駄作とわかるタイトルは。というか随筆じゃなかったのかよ。小説の中にあの発言でできたのかよ。というかそのタイトルであんな話が出てくるとかどんな話の展開が繰り広げられたんだよ。突っ込みどころ多すぎるだろ」

「長い、英語で言え」

「急に英語の問題出てきた……」

「正解はくくく”ふあ○きゅー”でした英語の突っ込みは全てこれです足りません」

「英語に対してあげつない偏見をご所持のようで」

「これも『ブラストホッパー倉木』に乗ってました」

「余計にそのブラストホッパーに興味が出てきたな」

「私の聖書バイブルでした」

「なんつー本を聖書バイブルにしていたんだ。そして今の聖書バイブルは一体なんなんだ」

「『ブラストフラッパー倉木』です」

「僕はその小説に続編が出ていることに驚きが隠せない」

「それ作者の後書きで同じことが書かれてました」

「作者すら困惑してるのかよ」

「ちなみに今作では、物を貸して金を取れ。性欲は道端に落ちている。英語で話しかけられたときはパードウンで全て対応できる、など結構参考になることが書いてました」

「どれも参考にならん。するな」

「阿良々木先輩も読みたいですか？」

「怖いもの見たさという小説を読みたい理由としては明らかに不適切な気持ち湧いてきてる」

「ですが、すみません。実は今この本は他の方にお貸ししてまして

……」

「今、何故か僕は安堵に包まれてるよ」

「羽川先輩に貸してあげました」

「どうしよう。選択肢として最悪に近いところに貸してやがった」

「ご安心を流石に私も図書室の本でボロ儲けするのは申し訳ないので、ワンコインにしておきました」

「内容を実践するな。今すぐ返してきなさい」

「返してくるのめんどくさいのでプラストホッパー倉木先輩にあげます」

「僕はそんな愛に対してえげつないことを言っていたり、金にがめつかったり、謎に英語に恨みがあったりしない。僕の名前は阿良々木だ」

「失敬、噛みました」

「変えてきたな」

「失礼、かみまみた」

「変わってない!?!」

「ふあっ〇ゆー」

「内容を実践するな」

「パードウン?」

「ふ〇つきゆー」

のじゃロリ狐ババア

「阿良々木先輩、私思うんです」

「どうした急に」

「のじゃロリ狐ロリババアっておかしくないですか？」

「ロリが二回入ってることは確かにおかしいな」

「ぶつぶー、一個目のロリはロリではなくくちりでした！」

「僕は会話してる、違うか？」

「違いますよ。文字列です」

「そうだな、会話してる。今お前ロリだったよな？明らかにくちりとは言ってなかったよな？」

「それは阿良々木先輩の二回の部分が二になってるのと同じくらいどうでもいいことです」

「そうか、で、のじゃくちり狐ロリババアがどうした」

「エッチですよね」

「それを言うためだけに、僕をこの気温四十度湿度五十パーセントの猛暑日の中燦々と日光が照らす公園に呼びつけたのか？」

「もしそうだと言ったら？」

「お前を殺す」

「きやあつ?!阿良々木先輩のエッチ！」

「今どこにエロスを感じたんだ」

「リヨナって性癖知ってますか？」

「お前本当になんでもいけるよな」

「くふふふ……私はロリシヨタ中学高校大学吸血鬼金髪銀髪男の娘触手ケモ化け猫優踏生ヤンキー性転換リヨナから阿良々木先輩までなんでもいけますから」

「この変態め」

「もちろんのじゃロリババア狐もいけますよ」

「だろうね」

「でも、私不思議に思うわけですよ」

「何がだよ」

「普通年取つてもものじゃ口調にならないですか？」

「……うん、確かにそうだな」

「あ、今『くつそどうでもいいな、そのためだけにこんな猛暑日の公園に呼びやがったのかよ。あくそム力つくぜ、こいつのことこの場で誘拐して犯してやろう』って思いましたね!?!いやん、阿良々木先輩のエッチー！」

「思ってたええよ!いや、前半部分は思ったけど後半部分は思っていないわ！」

「やつぱりどうでもいいって思ったんですね!失礼ですよ！」

「こんな猛暑日に公園に呼びつける方が失礼だろ!つーか、なんで公園なんだよーカフェとか色々あるだろー！」

「ここは私の家なので」

「ホームレスかなにかか貴様」

「例えですよ例え。最近はこちらに入り浸ってるんですよ」

「なんでこんな暑さなのにこんな場所に入り浸ってるんだよ」

「そこにシヨタがいるからです」

「……食べたりしてないよな？」

「してませんよ。個人的にシヨタの食べごろはもうちよつと年取ってからですかね」

「……取りあえず食べてないならいいや」

「代わりに、一緒に遊んであげつつちよつとエロスを振りまくことでシヨタくんの性癖を壊してあげてます」

「何してるんだお前」

「子供の頃の記憶って性癖に影響しますからね。私もそうでした」

「子供時代に何があればお前みたいな性欲性癖モンスターが産まれ落ちてしまうんだ」

「産まれ落ちるってなんかエロイですね」

「もう何でもいいんじゃないかな」

「そもそもものじゃ口調って何なんですかね?私あれ現実で見たことないです」

「唐突に話戻したな……まあ、僕は一人だけあったことあるな」

「え！阿良々木先輩のじゃロリ狐ババアにあつたことあるんですか！？」

「ロリ狐ババアどこから出てきた」

「へーでも、本当にいるんですねえ。なんてお名前ですか？」

「……………秘密だ」

「なるほど、私口硬いので安心してください」

「そういうことじゃない」

「そういうこと・じゃないさんですか？なかなか特徴的な名前ですね」

「僕もそう思うよ。これは二人だけの秘密な」

「私てつきり、二次元特有の誇張した嘘みたいなもんだと思ってたんですけどね、本当にいるんですね」

「まあ、それも間違つてないんじゃないか？老人感出す方法として手っ取り早くはあるだろうし」

「確かに、簡単に老害感でますよね」

「言い方」

「すみません。私の知り合いにババアがいるんですが、そいつが結構な老害でして」

「言い方」

「そういうこと・じゃないって名前なんですけど」

「点と点が？がったな」

「ババアのくせに若い男と恋愛してフラレてその八つ当たりを私にぶつけてきたんですよ。老害すぎませんか？」

「そりや迷惑な婆さんだな」

「ええ、お陰様で国を巻き込む三日三晩の乱闘になりました」

「規模がでかい」

「あのときつけられたこの傷の恨みはまだ忘れてません」

「バトル漫画か？」

「次あつたら殺します」

「殺害予告!?!」

「多分向こうもそう思ってるんじゃないですかね？」

「元気な婆さんだな、おい」

「ええ、ホント元気な老害でしたよ。今頃はロリババアにでもなってるんじゃないですかね」

「転生でもしたのか」

「輪廻の輪から外れたものは輪廻の輪に戻れませんよ。阿良々木先輩も……気を付けてくださいね?」

「は?」

「じゃあ、私帰りますね。暑いので」

「つておい!?本当にこの話のただけに読んだのかよ!」

「違います。この炎天下で阿良々木先輩を虐めるためです」

「まだ話のためだけの方がマシだった!」

「あ、阿良々木先輩、実はなんですがさっきの話嘘があるんです」

「嘘があるというか……全部嘘だったと思うが」

「ババアってのは嘘で私の方が歳上なんですよね」

「え?」

「全く、年上は敬えなんて常識じゃろうになあ?……なんて、くふふふ……」

時代とかもうめんどくせえ……

「阿良々木先輩。私、目覚めちゃいました」

「どうした。どうせろくでもないことなんだろうけど」

「世界の真実についてです」

「また面倒くさい方向に目覚めやがった」

「知ってますか阿良々木先輩、地球は平らなんですよ」

「違う」

「知ってますか阿良々木先輩、東京ドームの地下には『自主規制』が『自主規制』してるんですよ」

「お前のピンク思考と陰謀論が激突した結果、とんでもないバグが起きてるぞ」

「証拠映像もありますよ？見ますか？」

「見ない」

「……Hey guys」

「どこをソースにしてるんだ！」

「やはりこういうった情報はアングラな部分に集まりやすいのですよ」

「アングラにも程がある。というかお前まだ十八じゃないよな？」

「阿良々木先輩。十八禁を守っている人間がこの世に存在するだけでも思ってるんですか？どうせ阿良々木先輩も本屋で大人のフリして十八禁の本買おうとして身分証求められて逃げ帰るとかしてるんですよっ。」

「十八禁に守ったとは言わないが、流石にそんなアニメでしかやらないようなことはしてない」

「山のエロ本捨て場で拾ったんですね！」

「拾ってない！ついでに古臭い！」

「わかります。その気持ち、性に目覚め性を発散する方法を求めたどり着いたんですよね」

「おい、話聞けよ」

「それまで大変でしたよね。私も大変でした。私が性に目覚めたのは、そう五年前、町は雪で白く染まり、ムーンライトが雪に反射して

「幻想的な世界を作り出していたときでした」

「おい、独白を始めるな。あとお前どういう状況で性に目覚めたんだ。ムーンライトやめろ」

「私はそんな世界を一人で柄もなく雪に興奮して足音を鳴らしながら歩いていったんです」

「長い長い長い」

「そんなとき、あの人は現れたんです。その人はとても美しく綺麗でこんな人が現実に存在するのかと思いました」

「もういいか」

「あ、はい、わかりました」

「……それはそれで続きが気になる」

「打ち切られました」

「中々独特なタイミングで打ち切られたんだな」

「作者が性犯罪を犯したららしいです」

「性に目覚めちまったか」

「未成年は不味かったですからね」

「確かに未成年はいけないな」

「高校生でデビューの期待の新人だったんですけどね……」

「未成年そつちかよ！」

「おねシヨタに憧れたらしいです」

「高校生はシヨタではないな」

「おねの方です」

「もうやだ……」

「未成年同士はセーフですけど、ラインがありますからね」

「お前らライン越えすぎだろ。十八禁もつと守れ」

「棚上げって大事ですよね」

「うるさい」

「でも、阿良々木先輩、私こう思うんですよ。十八禁って遅くないですか?」

「遅い?」

「阿良々木先輩って人がいつ性に目覚めるかわかりますか?」

「思春期だっけ？」

「そうですね。思春期は十一から十八ですが……まあ、性に目覚めるのは十五十六あたりでしょうね。ちなみに私は五からです」

「取れてないぞ、マウント」

「おかしくないですか？」

「何がだ」

「性に目覚めるのは十五くらいなのに、『自主規制』のための『自主規制』は十八からしか見れないですよ！」

「それは、まあ……おかしいのか？あとお前もうちよつと発言をマイルドにしろ」

「おかしいですよ！だって、これじゃあ彼女つくらないと『自主規制』できないじゃないですか！」

「もうほんとに黙れ」

「阿良々木先輩ってなんで十八禁が十八歳からなのか知ってますか？」

「あー、それは……ん？なんでだ？」

「私は気になって調べてみました。学校のパソコンで」

「学校のパソコン」

「ですが、何故十八禁が十八歳なのかの科学的根拠は見つからなかったのです！」

「そ、そうか。ところで検索履歴は？」

「無論。残しました」

「もういいや……。で、それがどうしたんだ」

「というわけで、私は十八禁を十五禁に引き下げる学生運動がしたいです。阿良々木先輩手伝ってください」

「嫌です」

「青春ですよ！」

「学生運動は青春ではないと思うな」

「手伝ってくれたら阿良々木先輩と『自主規制』してあげますよ」

「僕には戦場ヶ原がいる」

「練習としてどうです？ほら、失敗したら恥ずかしいでしょう？」

「……………いや！そんなことできない」

「阿良々木先輩」

「なんだ」

「私の家のベッドの上で二人で裸でいる状態でそれを言っても誰も信じませんよ」

「うん、この小説に地の文がないことを悪用するな。ここは公園で二人共服を着ている」

「でも、今日の私の服裸よりエロくないですか」

「さつきから思ってたんだけどなんでお前服ずぶ濡れなんだよ」

「あの水飲むやつで失敗しました」

「なかなかワイルドに失敗したな」

「下は水着なので安心してください」

「少しは羞恥心を持ってほしいな透けてんだよ」

「下は水着なので安心してください」

「これは僕の持論だが水着であろうと服の下に着てたらそれは下着なんじゃないかというかなんで公園で水着着てるんだよ」

「脳内でシュミレーションした結果必要だと判断しました」

「一体どんなシュミレーションをすれば水着を着るといふ選択肢が生まれるんだ。そして本当に必要になってるのが謎だ」

「阿良々木先輩」

「なんだ？」

「呼んだだけ」

「うん、黙れ」

ハロウween

「ハロウweenですね。阿良々木先輩」

「ここは僕の部屋なんだけどな。どこから入ってきた」

「とりつくおあとリーと」

「すでにトリックしてるんだよお前、どんなトリック使ってこの密室に入ってきたんだよ」

「で、お菓子はどこですか？」

「凶々しいにも程があるぞお前」

「悪戯されたいんですか？」

「お前の悪戯は洒落にならなさそうだから勘弁してくれ」

「食べちゃうぞー」

「それはどういう意味だ」

「くふふふふふふふふふ」

「誤魔化すな」

「で、お菓子まだですか？どうせ持つてるんでしょ？ロリからとりつくおあとリーとって言われたときのために持っているんでしょ？」

「そんな不順な動機で持ってねえよ！」

「その言い方的に持つてるんですね？」

「……ほらよ」

「ありがとうございます。これは税込み五百円で箱売りで売っているチョコレート菓子の一つですね。確か箱一つにはこれが二十程……」

「おいやめろ、単価を出そうとするな！」

「では原価で」

「もつと下がる！」

「じゃあ阿良々木先輩悪戯しますね」

「おかしいな、オアって言ってた気がするな」

「人を信用しすぎるのは良くないですよ？」

「人を騙すのも良くないと思うんだわ。その油性ペンしまえ」

「安心してください。これはびっくりペンと言って油性に見せかけて水性です」

「人を信用しすぎるなってお前さつき言ったよな」

「今の私は怪物ですよ。がおー」

「さつきから思ってたけどお前のその仮装何？」

「狐娘ロリババアかつこ巫女すたいるかっこことじです。税込み一万円」

「ならじやってつけろよ」

「それはステレオタイプですから。今は新時代です。みんなお宝探してます」

「せめて海賊のコスプレをしてから言ってくれ」

「スタイルチェンジですか？確か狐娘ロリババアかつこかいぞくすたいるかつこことじもありましたよ」

「狐娘ロリババアはマストなのか？」

「だって人体の一部は取れないですし？」

「その耳はつけ物だろ」

「漬物はきゅうりが好きです」

「かつぱコスしろや」

「油揚げそんな好きじゃないんですよね」

「そのコスをするのに致命的に向いてねえ！」

「チョコのほうが好きです」

「狐ってチョコ駄目だったような……」

「え？なにそれ知らない。チョコうま」

「設定もクソもないな」

「大量摂取しなきゃ大丈夫なんで」

「知ってるじゃねえか」

「ところで阿良々木先輩」

「なんだ？」

「阿良々木先輩、あなたさつきからあることが凄く気になっていますよねっ。」

「……何の話だ」

「この尻尾、どこから生えてるのか……気になりますよねえ？」
「ぐっ……確かに気になってた！」
「くふふふ、みたいですかあ？みたいですよねえ？」
「みたい！滅茶苦茶みたい！どこから生えてるのか知りたい！」
「そりゃあ、もちろん。私のあ・そ・こですよ」
「くそっ！あそこってどこなんだ！」
「みます？みちやいますう？」
「……………いや！駄目だ！僕は戦場ヶ原一筋だ！」
「ヘタレ」
「ド直球！」
「八九寺ちゃんに抱きついてた癖に何が一筋」
「言い返せねえ！」
「まあ、選択肢は間違っていないですよ。ここで見ていたら妹が部屋に突入イベントが発生してましたから」
「ギャルゲーかなにかか？」
「そしたら阿良々木先輩は貝木ルートに突入しました」
「一体どんなルートなんだそれは!?!どんなストーリー展開が待っていったんだ!?!」
「ちなみにここで私を阿良々木先輩が襲えば私ルートに突入します。いかがですか？」
「いかがですかじゃねえよ」
「戦場ヶ原先輩突入イベントもセットです」
「僕に死ねと」
「妹突入イベントもセットです」
「修羅場に妹を巻き込むな」
「ところで阿良々木先輩は仮装しないんですか？」
「面倒くさい」
「えー、阿良々木先輩もしましょうよ仮装。狐娘ロリババアかつこめいど服すたいるかっことじとか」
「お願いだから狐娘ロリババアから離れてくれ」
「では離れてサキユバスとかどうでしょう」

「言い方が悪かったな。女装から離れてくれ」
「阿良々木先輩が女の子になれば解決ですね！タイ行きましようか」
「ハロウインにかける情熱が凄まじいな」
「仕方ないですね。ここは無難に吸血鬼とかにしますか」
「一氣に無難になったな」
「というわけでここに金髪ロングのウィッグがですね」
「女装から離れろって言ったよな！あとそれ今尻尾から出てこなかったかー」
「四次元尻尾です」
「ドラえもんもびつくりだなあ！」
「阿良々木先輩もほしいですか？」
「狐娘ロリババアにされそうだからやめとく」
「今ならなんと五千円で売りますよ」
「安いのか高いのかよくわかんねえ」
「高いですね」
「高いのかよ」
「でもほら、阿良々木先輩なんで」
「理由になってない」
「阿良々木先輩」
「また呼んだだけか？」
「……………」
「おい、なんか言えよ」
「はっぴーはろういーん」
「誤魔化すな！」

現実

「やほ」

「先輩に対する敬意を全くと言っていいくらい感じない挨拶をありがとう」

「尊敬してますよ？ねむ……」

「してないだろ。あくびやめろ」

「生理なので仕方ないですね」

「……」

「生理なので仕方ないですね」

「突っ込みづらいからやめてくれないかな？」

「寝ていいですか？なんのために私が保健室に来たと思ってるんですか？」

「どうせズル休みだろ」

「ズルじゃないです生理はガチです」

「お願いだから男にそういう話をふるのは勘弁してくれないかな」

「今なら生でヤツても大丈夫ですね」

「うん。やめろ」

「ちなみに私はピルは飲んでませんし、ゴムも無し派です。なので可能性は低いですけどお……デキちゃうかもですねえ」

「やらねえからな！」

「保健室って学園モノのあるあるだと思うんですけど」

「創作物と現実をごちゃ混ぜにするな」

「え？」

「え？」

「……まあ、別にそれはいいですけど。休みに来たのはホントですし」

「ガチなのか」

「信用ないですね。泣きますよ」

「ウソ泣きで騙されるほど僕は甘くないぞ」

「他人の目があるところで泣きますよ」

「こいつ……！ウソ泣きについては全く否定しねえし！」

「そういえば阿良々木先輩はどうして保健室に？トイレのほうがいいと思いますけど」

「僕は保健室で何をやると思われてるんだ」

「飯」

「流石に保健室には逃げねえよ！」

「じゃあ、あれですか？怪我？」

「保健室に来る理由は怪我が病気の二択なはずだと思うんだが、なんでそれが後からでてくるんだ」

「ほら、バカは風邪を引かないって言うじゃないですか」

「怪我でそれはもう神経に問題があるだろ」

「知ってます？阿良々木先輩。人間肋骨折れても気づかないこと結構あるらしいですよ」

「へー、そうなのか」

「つまり全人類バカってことです」

「お前はもう二度とつまりを使うな」

「つわり？」

「違うな」

「つわりって結構きついんですよ」

「その言い方は体験したことあるやつしかてきない言い方だな」

「もしかして阿良々木先輩私が処女だと思ってます？」

「え？あんの？」

「ああ、阿良々木先輩は知らないかもしれませんが、高校で既に卒業済みの子って多いですよ」

「なにそれ、僕知らないんだけど。あとつわりと非処女ってそんな関係なくね」

「案外みんなそんなものですよ。思春期ですからねえ」

「ま、まさか戦場ヶ原も……」

「初めては自分で奪いたいですね！分かりますその気持ち！」

「奪うって言い方やめてくんない？相思相愛だから。無理矢理とかじゃないから」

「まあ、大丈夫ですよ。あの人と付き合えるわけないじゃないで

すか」

「馬鹿にしてないかそれ」

「阿良々木先輩は人外なので問題なし！」

「……そつすね」

「いや実際問題、秘密知られたくらいで口の中にホチキスぶつ込んでくる人がまともにつき合えると思いますか？」

「ま、まあ、言われれば確かに……さて、なんでお前がそのことを知っている」

「くふふふふふふ……レディーには沢山秘密があるのでですよ」

「笑みが長い、というかレディー……？胸っ!？」

「殴りますよ。あそこから流れ出した血の染み込んだナプキン投げつけますよ」

「殴ったあとだし、とんでもないこと言ってるよこいつ」

「一万円で譲ってやらんこともないです」

「いらんいらん。てか高いな」

「メ〇カリでこの値段で売れたので」

「売るなよ!?!てか、買うやつレベル高すぎだろ！」

「後日返品されました」

「何があつたんでしような」

「何かあつたんでしようね」

「お前絶対なんかやっただろ」

「知らないですけど速達で送ったりしたわけでも真空パックに入れたわけでもないのでもんでもない劇臭でしたでしょうね」

「おい」

「血の匂いってなんか嫌ですよね」

「それホントに血の匂いだけか？確実に臭い原因は他にあると思うが」

「吸血鬼ってよく飲めますよねあんなもの」

「いや……うん、別にそんな悪いものでもないのかもしれないぞ。あとそこの血を飲む吸血鬼はいないと思う」

「飲んだことあるんですか？」

「……ノーコメント」

「ノーコメントってズルいですよね。逃げの一手といいですか、消極的選択というか、明言を避けることでいくらでも逃げられる」

「お前相手の保険だよ。昨今はちよつとした発言で燃えるから恐ろしいよな」

「私はそういうことしないので」

「嘘つけ。絶対ボイスレコーダーとか持つてるタイプだろ」

「そうですね。知らんけど」

「逃げるな」

「でも知らんけどはノーコメントには敵わないですよ」

「なんでだ？やってることは同じみたいなものだろ」

「切り抜けば言質を取られちゃうじゃないですか、知らんけど」

「雑談で言質を取ろうとするな。保険かけといてよかつたわ」

「伏線は雑談に入れとけてどこかで聞きました、知らんけど」

「それは小説の話であってリアルの話じゃない」

「え？」

「え？」

結婚

「結婚って、改めて考えると重いですよね」

「それよりもなんで朝起きたら見知らぬベッドで僕が寝っていて、その中にお前がいるのか教えてほしい」

「添い寝しに来ました」

「まず、ここはどこだ」

「昨日のこと覚えてないんですか……?」

「覚えてるから聞いてるんだが? 一夜の間違いなんて起きてないからな」

「今パンツの中確認してるくせに?」

「寝てるうちにやられた可能性は想定しておく」

「酷い! 私がそんな犯罪するわけないじゃないですか!」

「そうだな、誘拐犯。どうやって僕をここに連れてきた」

「バグです。失敗するくらやみに閉じ込められます」

「とんでもなくハイリスクなこととしてやがる」

「まあ、そんなことどうでも良くて」

「良くないが?」

「黙ってください。結婚って重いですよね」

「今人の体の上に物理的に乗ってるお前のほうが重い」

「女の子に重いは駄目ですよ?」

「誘拐よりは駄目じゃないと思うな」

「ちなみにこの体制は騎乗位です」

「どうでもよすぎる」

「お話戻しましょうか。結婚って重いですよね」

「えあ、うん。まあ、そりゃ結婚のシステムの重いだろ」

「そうですね……死ぬまでどこか来世も来世もその人結婚しなきゃいけないなんて」

「真実の愛を求め過ぎなんだよな。離婚って知ってるか?」

「知ってます! うちのお母さんがやりました!」

「突っ込みにくいボケをするな！」
「ただの冗談キティンクです、ご安心を」
「なおさら質悪い」
「これ、マジで言ってるんだけど」
「どちらにせよ質悪い」
「これが詰みってやつですか……」
「どちらかといえば罪だな」
「まあ、私の過去千年に渡っての罪なんてのはどうでもいいでしょう」
「罪を積み過ぎだ」
「今思ってたんですけど、私達話脱線し過ぎじゃないですか？」
「お前が言うか？」
「まるで私に話が脱線する原因があるみたいな言い方をされますね」
「そう言ってる」
「私のせいじゃないです。作者のせいです」
「確かに」
「これ以上作者の都合が出てくる前に話を戻しましょう」
「そうだな」
「結婚といえ、名字が変わるのもデカいですよね」
「そのとおりだ」
「もし、私があなたと結婚したら名字が全肯定botになるわけですね」
「確かに返答がワンパターンになっていたが、僕はロボットではなく人であり、人間で、名字は阿良々木だ」
「失礼、わざとです」
「ほんとに失礼だと思ってるか？」
「でも、最近夫婦別姓なんてのもありますよね」
「そーいや、そんなのもあったな」
「私として名前なんて凄まじくどうでもいいのですが」
「お前未だに僕に名乗ってないもんな」
「謎のヒロイン枠としての矜持です」
「どこに矜持を抱いているんだお前」

「暇ですしなんかカッコいい自己紹介文でも考えませんか？」

「暇じゃないが？家に帰してくれないか？」

「あ、私の名前は狐ですので覚えておいてください」

「矜持が行方不明だぞ」

「気軽に狐ちゃんってよんでね！」

「狐ちゃん」

「イントネーションが違う。やり直し」

「気軽くない！」

「それよりも自己紹介ですよ。自己紹介。キャンパスライフを失敗するために、できる限り厨二臭いダサイものを考えましょう」

「スタートからキャンパスライフを失敗しようとするな。もっと頑張れ」

「では、言い方を変えましょう。名前つてのは大切です。名は体を表すなんて言葉もあるくらいですから。なので、印象に残る自己紹介をしましょう。悪い意味で」

「悪い意味で」

「分かりましたか？ロリコン木変態暦」

「そうだな変態狐ちゃん」

「いけない子猫ちゃんみたいなこといいますね」

「うるせえ変態」

「あ、阿良々木先輩、こんな自己紹介はどうでしょうか？僕の名前は阿良々木暦。私立直江津高校に通う高校三年生だ。そんな僕の生活をこれからみなさんに紹介しよう。まず朝起きたら僕の可愛い双子の妹に抱きつく……ここから、阿良々木先輩の生活がきめ細かく語られていきます」

「確かにそんな自己紹介記憶には残りそうだな。悪い意味で」

「そうやって妹成分をチャージしたあとは、僕の彼女の戦場ヶ原にご飯を作ってもらおう。今日の朝食はパンと目玉焼き。非常に美味だ。ああ、朝から彼女にご飯を作ってもらえるなんて僕はなんて幸せなんだろう」

「これを自己紹介で言ったら多方面からブーイングが来そうだな」

「私もブーイングします」
「お前が始めた物語だろ」
「ていうか阿良々木先輩も私の自己紹介考えてくださいよ」
「名前も知らないのに？」
「いったじやないですか。狐って」
「絶対偽名だし、たとえ本当でも名字か名前を教えてないことになる」
「狐が名字と名前を兼ねてます」
「嘘をつくな！」
「これ、マジで言ってるんだけど」
「それはつまり狐を分解して犬瓜いぬうりって名前になるけどそれでいいのか
お前」
「私は犬瓜。犬らしき瓜」
「ダサイ。犬らしき瓜ってなんだ」
「犬の形をした瓜でしょう。犬種はトイプードル」
「SNSに上げたらバズりそうだ」
「まあ、ダサイならやめときますか」
「英断だな。で、どうするんだ？」
「私は狐。石を穿つ小雨」
「は？」
「では、結婚のために封印を解きましょう？にやんて」

な

「うーん」

「人の机で唸らないでほしいのだが」

「この机は学校のですよ？」

「じゃあお前のものでもないな」

「レディーファーストです。レディファ」

「癖の強い略し方だな。これから戦いでもするのか？」

「レディーファイト！ってことですか？阿良々木先輩戦います？」

「いや、僕は女の子を殴る趣味はないんだ」

「殴られるのが好きですもんね」

「違う」

「もうちよつと隠したほうがいいと思いますよ」

「そもそも存在しない」

「え、じゃあ”あれ”は何だったんですか？」

「それはこっちのセリフだ。あれってなんだ。何を指してる」

「……いえ、まあ、そんなことどうでもいいですよね」

「おい！ほんとになんだよ!!」

「そんなことより私の悩みのほうが重大です」

「お前はお前の悩みを過大評価し過ぎだと思う」

「どうすれば阿良々木先輩は私と結婚してくるのでしょうか？」

「まず、人をDM扱いするのをやめたらどうだ？」

「大体百年ほど前から考えてるのですが中々正解の選択肢が出てこないんですよ」

「出会うどころか産まれてすらいない」

「これじゃあ百年の恋も覚めてしまいます」

「物理的に百年経つもんな」

「それで、どうすれば結婚できると思います？阿良々木先輩」

「それ本人に聞くことか？」

「阿良々木先輩が阿良々木先輩を指すとは限りませんからね」

「同姓同名の誰かがいるのか」

「いません」

「嘘を突き通してくれ」

「もう面倒くさいので私のお母さんの話ということにしてください」

「せめて友人にしろよ」

「阿良々木先輩は人妻が嫌いですか？」

「いや……うん、ノーコメント」

「処女厨ですか？」

「言い方！」

「ご安心を、私のお母さんはまだ処女です」

「お前はどこから来たんだ」

「そこらへん」

「どこだよ」

「私ももちろん処女じゃないのでご安心を」

「あ、そう……」

「初めては阿良々木先輩に捧げてあります」

「記憶にございません！」

「阿良々木先輩は寝てましたからねえ」

「この前か!?この前やりやがったのか!？」

「くふふ、嘘ですよ。やっぱりもうちょっとムードがある感じでやりた

いですねえ」

「おお、常識的」

「ということだ」

「断る」

「どうしてですか?こんなに可愛い後輩から求愛行動されて断るなん

て」

「動物の生態みたいな言い方するな」

「狐ですのでえ」

「その名前の設定引き継ぐんだ」

「公式設定ですよ?数秒で考えたやつですけど」

「雑な設定だな」

「世の中閃きですので。阿良々木先輩の阿良々木だって数秒で考えた名前かもしれない」

「それは名字だ。親から引き継いだものだ」

「くふふ、まあ、そうですねえ」

「なんだその含みのある笑みは」

「いーえ？なんでも。それでなんで私と結婚してくれないんですか？」

「僕には戦場ヶ原がいるからな」

「相変わらず一途ですね。羨ましくて妬ましいです。阿良々木先輩が」

「僕かよ」

「一途なところ、妬ましいです。私はどうも飽きっぽいので」

「百年の恋はどうした」

「百年しか持たないって、軽いですよ」

「重いわ、めっちゃくちゃ重いわ」

「女の子に対して重いって、失礼ですよ」

「お前にだけは失礼と言われたくない」

「ちよつと質問なんですけど、もし戦場ヶ原先輩がこの世界にいなかったら私と結婚してくれたりします？」

「羽川と結婚させてもらうよ」

「うわ。ハーレムものでもまだ好きを突き通しますよ。二股ですか？気持ち悪い」

「ガチで引いてるけどお前の発言も同レベルだからな？」

「じゃあ、そこに重ねて聞きますけどもし羽川先輩もいなかったら……ああ、神原さんと八九寺ちゃんと千石ちゃんがいきましたね。もうちよつと待ったほうがいいと思いますけど」

「流石にその二人とはしねえよ!?!」

「神原さんとはするんですねえー」

「その次くらいには考えてやるよ」

「ま、近親相姦とかよりはマシですかね」

「妹とはしねえから!」

「ママとも?」

「するわけねえだろ!」

「しつつかし、こう考えたと阿良々木先輩愛されてますねえ。世の中の男子高校生から刺されても文句言えないですよ」

「本当にな」

「男子高校生を代表して私が刺しますね」

「お前は女だろうか」

「心は男です」

「お前の発言を聞いてると否定できないよ」

「まあ、私の性別なんてどうでもいいでしょう?何百年も生きてるとそこらへん曖昧になってくるんですよええ」

「お前の恥じらいのなさもそのせいか?」

「これは生まれつきです。私の生まれたときの泣き声は鳴き声だったらしいです」

「恐ろしいやつだなおい」

「しかし、まあ、四人目というのはなんとも微妙ですねえ。せめてトツプスリーには入りたかったです」

「なら僕をイジメるのをやめろ。正直に言うとお前と神原とのお前はいい勝負だ」

「まるで選ぶ権利は阿良々木先輩にあるみたいない方ですねえ」

「間違つてはないだろ」

「阿良々木先輩が愛想つかれちゃうかも?そしたら私が拾ってあげます」

「そのときは頼むよ」

「くふふ、阿良々木先輩改めて質問ですが、戦場ヶ原先輩と羽川先輩と神原さんがいないのならば、私と結婚してくれますか?」

「……」

「沈黙は肯定とみなしますよ?くふふ、ところで阿良々木先輩は私が欲に忠実なことは知ってます?」

「それはお前と無駄な会話を沢山してきてとても嫌にならくらいには実感しているよ」

「私、阿良々木先輩と結婚するためなら——」

「狐」

「はい？」

「それ以上言うなら僕はお前と結婚はできないな」

「……やだなあ、冗談ですよ。ただの小娘にそんなことできるはずないでしょう？」

「そうかもな」